

中国語の語句の重ね表現

劉 慶普

日常会話であろうが、小説またはその他の文学作品であろうが、語句の重ねの表現は数え切れないほど随所に見られる。このような語句の重ねの表現は、名詞、動詞、形容詞、数詞、量詞（助数詞）などに、それぞれ程度こそ異なるが、存在している。身近にあるどの文章を読んでも、多かれ少なかれ、語句の重ねの表現が目につく。

我常常在那些熙熙攘攘的火锅街、火锅城，望着那一家家喧嚣吵闹的店堂，望着那一口口翻滚沸腾的火锅，望着那一双双龙飞凤舞的筷子，望着那一张张熊熊火光映照下，热烈、兴奋、激动、忘情的脸，陷入沉思。

（符中士著《吃的自由》）

我们家乡以前吃除夕团年饭，家家户户都有一道名叫“年年积财”的菜。在一个大盘子里，依次整整齐齐摆着两条鲇鱼、一条鲫鱼、一条才鱼。借“鲇鲫才”的谐音，来表达祈求发财的心愿。“年年积财”几天都不能动，要餐餐摆上桌，一直摆过大年初三，才可以吃。

……挟一片放在嘴里，慢慢嚼，细细品，妙极。

（符中士著《年年积财》）

农历腊月二十四，家家户户打扬尘。不管穷人也好，富人也好，里里外外大扫除，把一年的晦气扫了，把新年的好运迎进，这就是“扫年”。

（齐东野著《扫年》）

我们时时刻刻都在向前走着，时时刻刻这条蜿蜒的长长的路向后缩了回去，又时时刻刻向前伸了出去，摆在我们面前。仍然再缩了回去，离我们渐远，渐远，窄了，更窄了，埋在茫茫的雾里。

（季羨林著《年》）

このように語句の重ねの表現を取り入れることによって、文章全体は、より生き生きと描き出され、より鮮明に、より正確になり、読者をその場に身をおいているような気持ちにさせるのである。しかし、語句の重ねの役割はこれだけではない。もう一つの重要な役割は、一部の語句がこのような重ねの形を借りて、ある一定の文法的な役割を果たしていることである。

今現在、愛知県立大学外国語学部中国学科一年次と二年次の「基礎漢語」と「漢語総合」に使われているテキスト『漢語教程』（北京語言大学が語学コースの留学生のために編集・出版したシリーズ教科書の一つ）を例にとって見ることにしよう。この『漢語教程』は、第一冊の上下から第三冊の上下までの六冊（100 課）からできている。語句の重ねは 22 課から出現し、大ざっぱに統計してみたところ、本文と閲読の部分だけでも、各種の語句の重ねの出現率は次の通りである。

品詞	例	出現回数	初出現
名詞	人人 家家……	15 回	51 課
動詞 (離合詞を含む)	看看 散散步 休息休息 摇摇头……	150 回	22 課
形容詞	圆圆 干干净净 好好儿……	100 回	43 課
数詞 量詞 數量詞	一一 个个 一步一步……	50 回	88 課 45 課 53 課

各課の文法事項に、動詞の重ね（第 22 課）、離合詞の重ね（第 32 課の注釈と第 35 課）、形容詞の重ね（第 43 課）、量詞の重ね（第 45 課）、名詞の重ね（第 51 課）、數量詞の重ね（第 53 課）について、簡単な説明がついている。これでも分かるように、中国語においては、語句の重ねは、基本的かつ大事なものであり、欠かすことのできない重要な構成要素である。語句の重ねは中国語の一大特徴とも言えよう。

語句の重ねにより、語義及び構文上に大きな変化がもたらされるため、学習者に中国語の重ねの表現を正確に理解、翻訳、活用させるには、教科書にある簡単な説明と限りのある例文だけでは、まだまだ無理がある。そ

れに、日本語にはこのような語句の重ねは、あるにはあるが、そのほとんどが「人々、時々、津々浦々、はきはき、びゅうびゅう」のような、擬声・擬態語や一部の副詞や名詞などに集中しており、中国語ほど頻繁に使われていない。これも学習者が中国語の語句の重ねにはなかなか馴染まない理由の一つに思われる。

このため、重ねの方法、重ねによる語義の変化、構文上の役割について、日本語と比較しながら、分析する必要が生じた。ここで『漢語教程』などから例文を取り上げながら、品詞別にまとめてみることにしよう。

(以下*マークが付くものはいずれも『漢語教程』によるものである。)

1 名詞の重ねとその意義

名詞の重ね方は比較的単純であるが、「複数」などの意味を表したり、構文上の役割を果たしたりすることができるように変身する。日本語にも似たような表現があるが、形式上同じものであっても、意味と用法が違うものがあるため、機械的に当てはめるべきではない。

1.1 単音節名詞の重ねは「AA」方式、二つの単音節名詞を併用する場合は「AA+AA」方式を使用し、二音節名詞の重ねは「AABB」方式を使用する。名詞の重ねは、元の意味の上に、「複数」、「あらゆる」、「毎」という意味が加味されるばかりでなく、構文上では原形の名詞が果たせない役割を名詞の重ねは果たしているから、原形の名詞に言い換えることができない。次の例文を見てみよう。

(1) 练气功必须坚持天天练，三天打鱼两天晒网不行。*

(気功を練習するには、毎日続けなければならない。三日坊主してはいけない。)

(2) 父亲给我讲了这个在中国人人都知道的故事。*

(父は僕に、この中国では誰もが知っているお話を聞かせてくれた。)

(3) 中秋节是中国人家家团圆的日子。*

(中秋節(十五夜)は、中国人にとっては、一家団欒の日である。)

(4) 古时的楚地，过春节时，家家户户都要做藕丸。

(符中士著《出污泥而不染》)

(古代の楚の国では、旧正月に、どの家でも蓮根の団子を作る風習があった。)

(5) 男男女女老老少少外出，都喜欢穿上一条肥腿的破长裤。

(符中士著《吃麻蛤的回忆》)

(村中の老若男女は、外出する時、皆好んで古いダボダボの長ズボンを着ていた。)

例(1)の「天天」は原形の「天」に言い換えられないが、「每天」に言い換えられる。日本語の「毎日」に訳せるが、重ねの「日々」には訳せない。

「日々」の使用例を見て分かるように、「日々の生活」、「日々の仕事」、「平平凡凡とした日々を送る」の「日々」は主に名詞或いは名詞の修飾語として使われるのに対して、中国語の「天天」は、時間状況語で、動詞の修飾語として使われている。

(2)の「人人」は、原形の「人」に言い換えられないが、「所有的人」、「每个人」に言い換えられる。日本語の「誰もが」「誰でも」に訳し、「知らない人は一人もいない」ことを強調する。日本語の「人々」は、「多くの人」という意味を持っているが、「あらゆる」、「すべての」という意味を持っていないため、ここでは「人々」は不適切であると思われる。

(3)の「家家」は「每个家庭」、「各个家庭」の意味だが、どれに言い換えても「家家」ほどふさわしい表現はない。(4)の「家家户户」は、それぞれ「家」と「戸」の重ねからできていると考えられる。それは、「家」と「戸」を組み合わせても一つの語にはならないからである。ここでは「各家各戸」、「每家每户」と言い換えてもよい。「どの家も」、「家々」に訳しても差し支えない。「家家」と比べたら、「家家户户」のほうが「例外なし」の意味がもっと強く感じられる。

(5)の「男男女女老老少少」はそれぞれ「男、女、老、少」の重ねでできたものである。「男女老少无一例外」に言い換えてもかまわない。日本語の「お年寄りから子供まで男も女も」に訳したり、「老若男女」に訳したりしてもよい。実は、ここで「男女老少」だけでも「年齢・性別に関わらない人々」の意味を十分に表すことができるが、重ねの形は「あらゆる」、「すべて例外なし」の語感をより強く表すことができる。もちろん、「男女老少」の前に「全村(村中)」のような限定語を付け加えたら、同じ語感を表現することが可能となる。

1.2 場合によって、単音節名詞は「AA」方式、二音節名詞は「AABB」方式に重ねたら、もともとの意味が消え、語義が大きく変化することもある。

る。次の例を見てみよう。

(6) 看着那斑驳的墙面，就知这条胡同曾经受过了几多的风风雨雨。

(锦州丝竹著《同一条胡同》)

(まだらにはがれ落ちている塀を見て、このフートンはどれだけの曲折を経たかが分かる。)

(7) 我觉得在男男女女的事情上太敏感了就是对妈妈的背叛。

(毕淑敏著《不宜重逢》)

(恋愛や結婚のことについて、あまりにも敏感になりすぎると、母に対する裏切りだと、私は思う。)

(8) 圆桌具有很大的透明度。大家围桌而坐，互相都可以看得清清楚楚。

不像西方那种长条餐桌，远远近近看得很吃力，有些角角落落还看不到。

(符中士著《中国人的大圆桌》)

(丸いテーブルはかなりの透明度がある。みんなはテーブルを囲んで座り、互いにはっきりと見える。西洋の長方形の食卓は違う。お互いに離れていて見にくいし、隅々まで見るできない。)

(6)の「风风雨雨」は目的語として使われている。ここで、自然現象の「風」と「雨」の意味が失われ、災難や曲折の多いことのたとえとして使われている。ほかの言い方にしたくても、「风风雨雨」より適切な言葉がなかなか見つからない。日本語に訳す時、簡単に「風」や「雨」に訳してはいけない。

(7)の「男男女女」は定語(連体修飾語)として使われている。「性別異なる人々」という本来の意味から「結婚相手を探したり、結婚したりする」へと転義したものである。文中に使われている「男男女女」と「会场上挤满了男男女女(会場は男女入り交ざってすし詰め状態だ)。」の「男男女女」とは明らかに意味が違う。

(8)の「角角落落」は主語として使われており、本来の建築物関係の意味がまったくなく、「食卓を囲んでいる人々」から、更に「食卓に並べてある数々の料理」までという意味合いを持っている。幸い日本語の「隅々」には「あらゆる方面」という意味を持っているから、ちょうどここでその意味を生かすことができる。

ここで分かるように、場合によっては、名詞は重ねの形をとったら語義が大きく変わり、本来の名詞にない意味を表すことができ、新たな意味を

与えられることになる。というわけで、重ねられた名詞を原形の名詞に替えたなら、文章自体が成り立たなくなることを考えられる。

1.3 ここで方位詞について説明を付け加えたい。単音節の方位詞は重ねられないが、対義語からできる二音節の方位詞には「AABB」方式が適応する。例えば、

上下 → 上上下下

前后 → 前前后后

左右 → 左左右右

里外 → 里里外外

具体的な例を見てみよう。

(9) 因为你在这个公司干了二十年了，上上下下的关系都不错。*

(あなたはこの会社で二十年も働いてきたんだから、上下関係は上手くいっているはずだ。)

(10) 她(妈妈)总是里里外外忙着，给我们做吃的。*

(お母さんはいつも休む暇なく、あれこれ作って食べさせてくれる。)

(11) 里里外外都有人偷铜，有的还因此成了万元户。(毕淑敏著《看家护院》)

(内部にも外部にも銅を盗む人がいる。中には、この為「万元戸」になった人もいる。)

このような方位詞の重ねは、前にあげた名詞の重ねと同じように程度を強めたり、描写性を高めたりすることができる。もう一つ重要な役割は、重ねられた方位詞は形容詞の機能を持つようになり、語義上にも構文上にも形容詞化されていると考えられる。

しかし、文脈によって、(10)の「里里外外」と(11)の「里里外外」のように、同じ形でも違う意味を表すことがある。(10)の「里里外外」は「忙着」を修飾し、せかせかと忙しい様子を目に浮かぶように描写されているのに対して、(11)の「里里外外」は主語として使い、「都」と呼応して複数を強調し、「銅を盗む人はどれだけ多いか、銅の管理はいかに難しいか」を強く訴えているから、同じように訳すことができない。日本語にはこのような重ねの表現もないし、一定の訳し方もないから、前後の文脈をよく見て工夫しなければならない。

2 動詞の重ねとその意義

動詞は、文の中心であり、文の程度や性質などを左右している。同時にその程度や量はほかの語彙要素にも直接的に或いは間接的に影響されることがある。重ねられた動詞も例外ではない。

動詞の重ねの大きな意義は動作・行為の反復回数、持続時間の変化にある。つまり、量的変化である。動詞の重ねは日本語にはほとんどないが、中国語では欠かせないものである。だから、動詞の本来の意味を理解するとともに、それと組み合わせたほかの要素との呼応に注意を払う必要がある。これは動詞の重ねをよりよく理解するためのよい方法かもしれない。

2.1 単音節動詞の重ねは「AA」方式を使用する。ほかに「A—A」、「A了A」、「A了—A」の形もよく見られる。二音節動詞の一番よく使われる重ねの形は「ABAB」と「AB了AB」であり、離合詞は「AAB」方式で重ねられる。動詞の重ねは軽い命令や試しを勧めるなどの意を表す時によく使われるから、「ちょっと～する」とか「ちょっと～してみる」とかに訳するのが普通である。しかし、ほかの語彙要素との呼応を考慮して、一律に「ちょっと～する」に訳することができない。次の例を見てみよう。

(12) 练气功对身体有好处，你也来练练吧。*

(気功は体にいいから、あなたもやってみたら。)

「你～吧」は命令文の一種で、このような命令文には動詞の重ねがよく使われる。試してみるように勧める意を表す。

(13) 师傅，我的自行车坏了，快点儿给我修修。*

(あの、自転車が悪れたので、今すぐ直してくださいよ。)

「给我～(してくれ)」の命令文で、「快点儿(速く)」に修飾されている「修修」は反復回数が少ない、持続時間が短いことを強調している。この場合、「ちょっと」を無視した方がよい。

(14) 崔明顺手调了调电视机的对比度。 (达理著《除夕夜》)

(ツウエミンはついでにテレビのコントラストを調節してみた。)

動詞の重ねはもともと軽微、随意という意味がある。ここでは「顺手(ついでに)」という副詞と呼応し、随意と持続時間の短いことをより強く強調

している。

(15) 中医看病不化验，只用手摸一摸就给你开药方。*

(漢方医は診察のとき、検査などをしないで、ちょっと手で触るだけで処方箋を書いちゃうの。)

「只」には動作・行為の範囲や程度、動作・行為と関連する事物の数量を限定する意味がある。ここで動詞の重ねと呼応し、回数の少ないことと持続時間の短いことを強調している。

(16) 她开开门，拿起花，闻了闻，真香。*

(彼女は扉を開けて、花束を手に取り、嗅いで見たら、なんといい香りだろう。)

三つの動作が前後の順で並列した文。「開」という動詞はもともと瞬間動詞であり、「拿」は「起」をつけることにより、瞬間に完成する意味合いを持つ。「聞了聞」も回数が少ない、時間が短いことが考えられる。ここで三つの動作は、「ちょっと」を入れる暇もないぐらい相次いで発生する様子を表している。

(17) (我对罗兰说) 学校离这个公园不太远，可以经常骑车到这儿来玩儿。

爬爬山，划划船或者散散步，聊聊天。*

(学校は公園にあまり遠くないし、(これから) しょっちゅう、自転車で遊びに来られるよね。山登りをしたり、ボートを漕いだり、或いは散歩をしたり、世間話をしたりするとか、と私はローランに言った。)

公園に近いという前提で、「可以经常」が続くから、簡単にできるニュアンスがあり、それに後継の動詞の重ねの連続使用は経常性、習慣性の動作・行為を表しているから、「ちょっと」よりむしろ「～たり、～たり」に訳したほうがよい。

(18) 她决定等耿林醒来跟他推心置腹地谈谈。 (皮皮著《比如女人》)

(彼女は、ゲンリンが目覚めたら、彼と腹を割って話しをしようと心を決めた。)

動詞の重ね「谈谈」だが、「推心置腹(誠意を持って人に当たる)」という四字熟語に修飾され、随意などの意味がすっかり失われ、「しっかり」、

「じっくり」という意味が強調され、この「談談」も長く続きそうである。こういう時の動詞の重ねより前に来る修飾語にその程度が左右される。

次のような表現も似たようなものである。

小刘老师要我好好管教管教他。*

(若い劉先生は彼を厳しくしつけるように私に言った。)

我希望的是妈妈多陪陪我，而她却没时间。*

(私はお母さんにももっと相手にしてもらいたいのに、お母さんはそんな暇がない。)

我们三个人也该好好聚聚了。*

(私たち三人はいつかゆっくりお会いできるといいね。)

動詞の重ねは、軽微、随意、試みなどの意味を表す。しかし、ほかの語彙要素との組み合わせを重視しなければならない。それは、それぞれの組み合わせに伴って、軽微、随意、試みなどの意味が失われ、その代わり、程度の変化が強調されると考えられるからである。

2.2 単音節動詞或いは二音節動詞の重ねにいくつかの要素を付け加えると、2.1 と違って同一動作や同類動作の反復回数の多いことが強調されることになる。次の例文を見てみよう。

(19) 儿子去大学前一天，史工程师嘱咐了又嘱咐。*

(大学へ行く前の日、史技師は息子に何回も何回も注意をした。)

(20) 阿加尔教授对学生的要求很严格，总是挑了又挑，选了又选，四五年才收一两名。*

(アカル教授は学生に対してとても厳しい。いつも篩にかけて選びに選んで、四五年に一人か二人しか受け入れなかった。)

(21) 舌头跟石子磨呀磨，有时嘴里都流出血来。半年过去了，小石头磨得光光的，我的英语成绩也进入了全班前三名。*

(舌で石ころを転がしに転がして、口から血が出る時もあった。半年が経って、その石ころがつるつるに磨かれ、僕の英語成績もクラスの三位以内に入った。)

(22) 考试开始了，我在外边不安地走来走去。*

(テストが始まった。私は教室の外で行ったり来たりして、落ち着かなかった。)

- (23) 踢来踢去 也不见进球，……足球有什么好看的。*
(いくら蹴ってもゴールが決まらない。…サッカーって、何が面白い?)
- (24) 我想着想着，不禁流下泪来。*
(私は考えているうちに、思わず涙を流した。)
- (25) 划着划着忽然看见前面一片桃花林。*
(小船を漕いでいるうちに、辺り一面の桃の花が目に入った。)
- (26) 几千人的厂子，人流出出进进，万良眼前就像终日流淌着一条彩色的河。
(毕淑敏著《看家护院》)
(何千人もの従業員のある会社だから、人の出入りが激しい。ワンリヤンの目の前は、まるで一日中色とりどりの川が流れているようだ。)
- (27) 打猪草时，它常在我前边蹦蹦跳跳，玩儿得可高兴了。*
(豚の餌になる草を) 草刈の時、子トラはいつも私の前後で飛んだり跳ねたりして、楽しそうに遊んでいる。)
- (28) “还行，还行。”柴罗锅含糊含糊地说。(达理著《除夕夜》)
(「まあまあ」とツイロウグウは言葉を濁らした。)

(19)のように、二音節動詞の「AB 了又 AB」方式を利用して、同じ動作の繰り返しを強調した。単音節動詞も同じような使い方もある。(20)のように、「A 了又 A」の後ろにもう一つ類義語の「A 了又 A」を加えて、その繰り返しの意味を更に強調することができる。次のような組み合わせもある。

擦了又擦，扫了又扫 (掃除する動作を繰り返す様子)

涂了又涂，改了又改 (文章を直す動作を繰り返す様子)

翻了又翻，找了又找 (物を探す動作を繰り返す様子)

(21)のように、単音節動詞の「A 呀 A (呀)」の形を利用して、同じ動作の持続時間の長いこと、過程が長いことを強調する。同じ動作が延々と続き、後続の文は「终于(やっと)」などで結果を表す文が多い。例えば、

等啊等啊，总算把他等来了。(待ちに待った結果、やっと彼が姿を表した。)

跳呀跳呀，一直跳到深夜。(踊りに踊って、深夜まで踊りまくった。)

(22)(23)は同じ、単音節動詞と二音節動詞が「～来～去」を借り入れて、「A 来 A 去」、「AB 来 AB 去」、「A 来 B 去」の形で動作の繰り返し回数の多いことを強調する。単音節動詞の類義語も対義語も同じ使い方がある。例えば、

琢磨来琢磨去 (よくよく考えて)
 研究来研究去 (研究に研究して)
 搬过来挪过去 (搬过来搬过去) (こっちに運んだりあっちに運んだり)
 思来想去 (想来想去) (考えに考えて)
 挑来选去 (挑来挑去) (選びに選んで)
 出来进去 (出たり入ったり)

(24)(25)は「A着A着」の形で複文の前文に述語として使い、後続文はほとんど「便～了」、「就～了」、「竟～(起来)」、「突然～了」などのような表現で、ある動作・行為或いは状況の出現を表す文がくる。日本語の「～しているうちに」に相当する。

(26)(27)(28)の場合は、単音節の類義語動詞或いは対義語動詞は、「AA+AA」方式で重ね、動作の回数が多いことを表す。「吃吃喝喝、说说笑笑、踢踢踏踏」はこの類である。重なる前の動詞と比べれば、抽象的な意味になり、比喩の意味合いを持つ。一般的に、二つの動詞の前後の位置は決められていないが、「出出进进」は「进进出出」とも言う。しかし、中には慣わし次第に定まって、広く一般に認められたものもあるから、前後の語順を変えないのが普通である。このような「AA+AA」方式の重ねはもともと「AABB」方式の重ねだと考えている人も少なくない。それは重なる前は二音節動詞として使う一面もあるからと考えられる。

要するに、動詞は重ねによって、程度と量に変化がもたらされる。つまり、動作の反復回数が多くなったり、少なくなったり、持続時間が長くなったり、短くなったりする変化がもたらされる。実際に使う時、よくほかの要素と呼応しながら使うことが多い。この意味ではこれらの要素が程度や量の変化を強める役割を果たしている。

2.3 一般的には、二音節動詞は「ABAB」方式が普通であるが、動詞の重ねを調べているうちに、次のような面白い表現が目に入る。

(29) 花花见到我们时已经站不起来了，只是摇动摇动尾巴表示高兴。我赶紧喂了它一碗牛奶，它才慢慢站起来摇摇晃晃地跟着我们回家。*

(ホアホアは私たちと対面した時、もうすでに立ち上がる力さえもなくなつた。ホアホアは嬉しかったのに、尻尾をちょっと振ることしかできなかつた。私はすぐ牛乳を一杯飲ませた。ホアホアはやっとゆっくり立ち上がり、ふらふらしながら、私たちの後について家に帰った。)

ここで「揺動」は「ABAB」方式を使い、「摇晃」は「AABB」方式を使っている。「揺動」も「摇晃」も二音節動作性動詞なのに、なぜ重ね方が違うのか。

実は、中国語では動作性動詞は状況語（連用修飾語）として使用できないのである。幸い、動詞には重ねの方法があるから、一部分の動作性動詞は重ねの形をとることによって、動詞を修飾する機能が与えられるのである。重なってはじめて後続の動作や行為を状態や方式や様子から修飾できるようになるのである。このような動作・行為に対する修飾作用は、形容詞と同じ性質を持っていると考えられる。ここで、「揺動揺動」は述語として、つまり動詞として使われており、「揺摇晃晃」は状況語（連用修飾語）として、「回家」を修飾し、つまり形容詞的に使われている。

「AABB」方式で重ねられる二音節動詞の多くは同じ意味或いは似たような意味を持つ動作性語素から構成されている。次のような例もある。

(30) 他总爱在人背后指指点点的，当面却总说好听的。

(白水社《中国語辞典》)

(彼はとかく人に隠れてぶつぶつ陰口をきいているが、面と向かえば体裁の良い言葉しか吐かない。)

(31) 那砖垛子摇摇晃晃，两个人若再一动弹，那还不塌下来成了合坟墓了？

(毕淑敏著《看家护院》)

(その積まれたレンガはぐらぐらして倒れそうだから、もし二人が動いたら、崩れて合坟墓になっちゃうよ。)

(32) 实在忍不住讲到性的时候，也总是羞羞答答，遮遮掩掩。

(符中士著《吃的自由》)

(どうしてもやむを得ず性の話をしなければならない時もいつも恥ずかしげに、ごまかそうとしている。)

(33) 老兵吸足了烟，晃晃悠悠走过来。 (毕淑敏著《看家护院》)

(年配の兵士はゆっくりと一服してから、よろよろと歩いてきた。)

上記の例文を見て分かるように、一部の二音節動作性動詞は状況語（連用修飾語）として使うとき、「AABB」方式に変えなければならない。そればかりでなく、述語として人や事物の状態などを叙述する時も「AABB」方式が必要である。このように重ねられた動詞は形容詞の機能を持つようになり、語義上にも構文上にも動詞の形容詞化の表現と考えられる。

こうして動詞の重ねは、動作の程度に量的変化をもたらしているだけで

なく、構文上にも質的变化をもたらしている。

3 形容詞の重ねとその意義

形容詞は人や事物の性質や状態を表す語である。形容詞の重ねは、元の意味を保ちながら、程度の変化（強めたり、弱めたり）を表すことができる。中の一部分は描写性の強い表現として使われるようになる。名詞の修飾語としてしか使わない非謂形容詞が重ねられないが、そのほかの形容詞は、単音節であれ、二音節であれ、ほとんど重ねられる。

3.1 単音節形容詞

単音節形容詞のほとんどは重ねられる。重ねかたは「AA」方式である。程度副詞「很」などを借りて「很A很A」方式も使われる。ほかには類義語或いは対義語の単音節形容詞を併用して、「AA+AA」方式もある。構文上では述語や定語（連体修飾語）として使うこともできるし、状況語（連用修飾語）、目的語として使うこともできる。次の例を見てみよう。

(34) 小虎一双水汪汪的眼睛，小牙白白的，好可爱啊！*

（子トラは、パッチリとした目をしていて、歯が真っ白で、なんと可愛いだろう。）

(35) 他要走的路还很长很长。*

（彼がこれから歩む道はまだまだ長い。）

(36) 听了师傅这句话，我心里立刻感到暖暖的。*

（師匠の話聞いて、私の胸にはたちまち暖かいものを感じた。）

(37) 孩子们在雪地上“堆雪人”、“打雪仗”。小脸和小手冻得红红的。*

（子供たちは雪の中で、雪だるまを作ったり、雪合戦をしたりしている。顔や手が寒さで真っ赤になっている。）

(38) 北京的胡同都是非常珍贵的，应该好好地加以保护。*

（北京のどのフートンも貴重なものばかりで、大事に保護しなければならない。）

(39) (那孩子) 脸上露出甜甜的笑，嘴里也甜甜地说：“这种葡萄好甜啊！谢谢叔叔！”*

（あの子は顔に可愛い笑みを浮かべながら、可愛い声で「この葡萄、本当に甘いね。ご馳走様。」と言った。）

- (40) 窗外，雨还在轻轻地下着。……窗外仍然是细细的雨声。*
(窓の外は、雨が相変わらずしとしとと降っている。…窓の外から、しとしとと雨の音がする。)
- (41) 一条胡同可能就是由很多大大小小的四合院连接起来形成的。*
(フートンは大きさそれぞれ違ういくつもの四合院が連なってできたのかもしれない。)
- (42) 他交到出版社的不再是厚厚的书稿，而是一张薄薄的软盘。*
(彼はもう出版社に分厚い原稿を提出する必要がある。薄っぺらのフロッピーディスク一枚で済んでしまう。)
- (43) 出发时天气好好的，没想到刚到就下雨了。*
(出かけた時、空はあんなに晴れていたのに、着いた途端雨が降ってきた。)

以上あげられた単音節形容詞の重ねや派生した重ねの色々は、構文上の役割に関わらず、いずれも程度が強められている。白白>白、红红>红、轻轻>轻、厚厚>厚、薄薄>薄、好好>好などなど。しかし、単音節形容詞を重ねの形に変える目的は、単なる程度の強めだけではない。構文上では、文が成立するかしないかを左右する重要な役割を果たしているのである。

単音節形容詞の重ねは、述語と補語として使う時、上記の(32)(41)のように、後ろに「的」をつける。定语（連体修飾語）として使う時、(37)(38)(39)(40)のように、後ろに「的」をつける。状況語（連用修飾語）として使う時、後ろに「地」をつける。省略しても構わない。口語ではよく後に「儿」をつける。以上のいずれも、原形の単音節形容詞に言い換えたら文が成立しなくなる。日本語では、このような役割はすべて形容詞の活用形が担っている。

ここで取り上げなければならないのは、(29)の「大大小小」である。「大」と「小」はもともと二つの単音節形容詞であり、対義語である。この二つの単音節形容詞を「AA+AA」方式で重ねたら、「複雑多様」という意味を表すことになる。意味上の変化だけではなく、構文上でも、文を成り立たせる重要な役割を果たしている。勿論、原形の「大」「小」に言い換えることができないから、むしろほかの言い方（例えば、「大小不等」）にしたほうがよい。次の例も同じことが言える。

- (44) 操作台上有一些红红绿绿的按钮。 (毕淑敏著《看家护院》)

(操作盤には赤やら青やらいろいろなスイッチがある。)

ここの「红红绿绿」は「红」「绿」の二色だけでなく、ほかに色々なスイッチが光っていることも考えられる。「红」と「绿」は重ねてはじめて連体修飾語として使える。原形の「红、绿」に言い換えたなら文が成り立たなくなる。

(45) 驻足细看，只见临街两个玻璃橱窗里，立着几根枯枝，上面盘着吊着爬着长长短短粗粗细细各种各样的蛇。 (符中士著《醮龙以食》)

(足を止めてよく見ると、道路に面した大きなガラスのショーウィンドーの中に、何本かの枯れ木が立っている。その上には、長ささまざま、太さまちまち、いろいろな蛇がとぐろを巻いたり、ぶら下がっていたり、這っていたりしている。)

ここの「长长短短」「粗粗细细」はいずれも「各种各样」に対する追加説明であり、「各种各样」と同じ「蛇」の連体修飾語である。それに、それぞれ違う状態を表す三つの動詞「盘着・吊着・爬着」によって、ショーウィンドーの中の様子を余すところなく描写されている。上記の表現の代わりに、「长短不一」「粗细各异」のような表現を使っても、同じように修飾の目的を達することができるが、重ねた表現の方がなんともいえない生き生き感が感じられる。

3.2 二音節形容詞

二音節形容詞の一部も重ねの形がよく使われる。その重ね方も比較的多く、一番主要な重ね方は「**AABB**」方式である。例えば、「舒舒服服、安安静静、痛痛快快」などがこの類である。そのほか、一部の状態形容詞は「**ABAB**」方式を使う。例えば、「雪白雪白、笔直笔直、火红火红」などがこの類である。たまに、「**ABB**」方式、例えば「凉冰冰」、「**BBA**」方式、例えば「冰冰凉」も見られる。これらの重ねの表現は述語として使われたり、連体修飾語として或いは連用修飾語として使われたりする。次の例を見てみよう。

(46) 他把车胎泡在水里，仔仔细细地检查起来。*

(彼は自転車のチューブを水につけて、注意深く調べ始めた。)

(47) 我辛辛苦苦干了一整天，快累死了。*

(俺は丸一日一生懸命に働いて、死ぬほど疲れた。)

- (48) 室内一面大镜子，几把转椅，收拾得干干净净。*
(室内では、大きな鏡と回転椅子が置いてあり、綺麗さっぱり片付けてある。)
- (49) 我的母亲，这位普普通通的农村妇女……。*
(私の母親、ごく普通の農家の女性は、……。)
- (50) 室友也受我影响，每天恍恍惚惚。*
(ルームメートも僕に影響され、毎日ぼうっとしている。)
- (51) 姑娘和小伙子们打扮得漂漂亮亮的。*
(娘たちも青年たちもみんな綺麗に着飾っている。)
- (52) 只要往课堂上一站，什么累呀烦呀，都忘得干干净净。*
(教壇に立つと、疲れや苛立ちなんか、吹き飛んでしまう。)
- (53) 火炉旁放着一双烤得暖暖和和的拖鞋。*
(炉辺に温められたあったかいスリッパが置いてある。)
- (54) 除此之外，我还有一个值得骄傲的、地地道道的中国胃。
(符中士著《我的中国胃》)
(そのほかに、私には誇りのある、正真正銘の中国的胃袋を持っている。)

単音節形容詞とは違って、上記の例文のように、

連用修飾語として使う「**AABB+(地)**」を→「**AB+地**」に、

連体修飾語として使う「**AABB+的**」を→「**AB+的**」に、

補語として使う「**動詞+得+AABB**」を→「**動詞+得+很+AB**」に、

基本的には形容詞の原形を(副詞などをつけるのが条件で)使ってもよさそうで、言い換えても、大した意味の変化もない。これで分かるように、このような形容詞の重ねを使う場合は、程度の変化が認められるが、語義の変化や構文上の変化は認められない。しかし、二音節形容詞が述語として使う時、例外もある。例えば(50)のように、重ねの形でなければ文が成り立ちにくく、重ねが構文上の役割は大きい。

3.3 二音節形容詞の重ねには、同じ語でも二通りの重ね方が見られる。それは、「**AABB**」方式と「**ABAB**」方式である。次の例を見てみよう。

- (55) 你上大学了，你爸还不知道，去跟他说一声，也让他高兴高兴。*
(あなたが大学に受かったことはお父さんがまだ知らないから、お父さんに伝えて、喜んでもらわなくちゃ。)
- 送些礼，让检查团高兴高兴。*

(検査団になにか贈り物をして、喜ばせたほうがいい。)

(56) 老人和孩子们都高高兴兴的。*

(お年寄りも子供もみんな大喜びだ。)

回家后，我高高兴兴地把这件事讲给父亲听。*

(帰宅した後、私は嬉しい気持ちでそのことを父に話した。)

她实在不忍心告诉他身边这些高高兴兴的孩子们。*

(彼女はどうしても身の回りの嬉しそうな子供たちにそれを伝えるに忍びない。)

(57) 咱们在这儿暖和暖和吧!

(达理著《除夕夜》)

(俺たちここで少し温まろう。)

喝点儿酒，暖和暖和身子。

(お酒でも飲んで、体を温めよう。)

(58) “谁家过年不愿意暖暖和和的?”

(达理著《除夕夜》)

(「誰でも暖かい家でお正月を送りたいよ。」)

(59) “你还没让我明白明白呐，可我都坦白了。”吴刚说。

(皮皮著《比如女人》)

(「私は何もかも白状したのに、あなたはまだ何も私に言っていないじゃないの。」と、ウーガンは言った。)

(60) 事情明明白白地摆在面前，可以看得十分清楚。

(商务印书馆《应用汉语词典》)

(物事が明らかに目の前に並べてあるように、はっきり分かる。)

上記の例文に出てきた重ねの表現は、二音節形容詞の二種類の重ね方というより、もともと形容詞でもあり、動詞でもあることによるものだったほうがいい。形容詞として使う時は、例文の(56)(58)(60)のように「AABB」方式を使い、動詞として使う時は、例文(55)(57)(59)のように、「ABAB」方式を使う。上記のような語は、最初にほとんど形容詞として教科書に出て、形容詞として教えられ、そして形容詞として記憶する為、先入観にとらわれ、動詞としての一面を無視されてしまう。理解と訳す時も、形容詞の意味に左右されてしまうから、注意すべきである。

実は、日本語にも形容詞と動詞が同じ語根を持っている現象がある。例えば、「暖かい、暖まる、暖める」、「楽しい、楽しむ、楽しむる」などがある。違うのは、日本語では形から簡単に見分けることができるが、中国語は同じ形をしている。というわけで、文を読む時、動詞として使われてい

るか、それとも形容詞として使われているかを判断する必要がある。われわれは、単純に重ね方(つまり形容詞なら「AABB」方式、動詞なら「ABAB」方式)から、判断してもよい。しかし、ごく一部の二音節形容詞は動詞ではないが、動詞的使い方をすることもあるし、同じ「ABAB」方式を用いる傾向もある。例えば、

换个环境，新鲜新鲜。

(環境を変えて、気分転換してみたら。)

晚上泡个热水澡，好好儿舒服舒服。

(夜に熱い風呂にでも入って、ゆっくり体を休ませよう。)

咱们把孩子接走，让妈清静清静。

(子供を連れ帰って、お母さんを一人にさせてあげよう。)

このような形で重ねられた形容詞は、動詞の機能を持つようになり、語義上にも構文上にも形容詞の動詞化と考えられる。「ABAB」方式で重ねられた語句は、「使役」という意味合いを持ち、「誰かに体験させたい」という意味を表すことができるから、「人 ABAB」の文がよく見られる。

4. 数詞・量詞・数量詞の重ねとその意義

数詞・量詞・数量詞は、重ねたら新しい使命が与えられ、構文上では重要な役割を務めることになる。

4.1 数詞の重ねとその意義

一般的に、数詞は構文上では状況語(連用修飾語)として使用できない。しかし、重ねたら状況が変わる。

重ねられる数詞はそれほど多くはないが、『漢語教程』とその他の作品から、次のような文を見つけることができた。

(61) 他站起来，一一给大家斟酒。 (达理著《除夕夜》)

(かれは立ち上がり、一人一人にお酒を注いだ。)

(62) “把顶灯关了，把地灯打开，把床头灯打开，把蜡烛点上，把那盘竖琴的轻音乐放上。”耿林一一照做了。 (皮皮著《比如女人》)

(「シーリングライトを消して、スタンドライトをつけて、ベッドサイドライトをつけて、ろうそくに火をつけて、あのハーブの軽音楽を流して。」

ゲンリンは一々言われたとおりにした。)

(63) 我们收工后, 吃完饭, 洗过澡, 三三两两到湖堤上去散步。

(符中士著《鳖》)

(一日の仕事を終えて、食事を済ませて、一風呂を浴びた後、私たちは三々五々湖の畔へ散歩に行く。)

(64) 幸运的林晓莲成了千千万万被救助者中的一个。*

(運がいいリンシャオリエンは救助を受ける幾千幾万の中の一員になった。)

例の(61)(62)のような基数「一」の重ね「一一」は「逐一」の意味を表し、「一」対「複数」の関係を表し、状況語として使われている。文中に、またよくそれと呼応するものがある。例えば、(61)の中の「大家」という複数を表す言葉があるから「一」対「複数」の関係が成立する。また(62)のように、「照做(言われるとおりにする)」という動詞があり、ゲンリンが妻の指示通りに、「关了顶灯→打开地灯→打开床头灯→点上蜡烛→放上音乐」の順に動作をしたので、「一」の人対「複数」の動作の関係が成立する。

しかし、(63)の「三三两两」は「逐一」の意味がなく、日本語にある「三々五々」と同じ意味である。描写の意味が強く、「到湖堤上去散步」の様子を表している。「三五成群」或いは「三个一群两个(五个)一伙」という言い方に言い換えてもよい。ちなみに、似たような概数の重ねは、ほかにまた「七七八八(ものなどがごちゃごちゃしている様子)」がある。

(64)のような「位」を表す二つの数詞「千、万」の重ねもよく見かけ、「数多くの」、「幾千幾万」の意味を表す。

4.2 量詞・数量詞の重ねとその意義

中国語の名量詞も動量詞も重ねて使用することができる。主に、「毎」や「複数」を表す。そして、重ねてはじめて主語として或いは定语(連体修飾語)、述語、状況語(連用修飾語)として使用できる。量詞の重ねはよく数詞の「一」と組み合わせて、数量連語が構成され、「ABB」或いは「ABAB」方式で文に出てくる。時には「AB又AB」の形で使うこともある。後に「的」をつけて連体修飾語として使い、「地」をつければ(省略可)連用修飾語として使う。「……毎に」「逐一」「逐一反復」の意味を表す。次の例を見てみよう。

(65) 考生一个个进去, 又一个个出来。进去时, 个个面部严肃, 内心兴奋; 出来时, 个个唉声叹气。*

(受験生は一人一人入っていく。また一人一人出てくる。入る時、みんな緊張な表情をしていて、内心は興奮しているが、出てきた時、みんなため息をついている。)

(66) 胡同就是北京一条条的小街道。*

(フートンとは北京の一本一本の横町のことだ。)

(67) 饭要一口一口地吃，事要一件一件地办。(商务印书馆《应用汉语词典》)

(飯は一口ずつ食べるのと同じように、用事は一つずつ済ませなければならぬ。)

(68) 这些照得非常好，张张都很漂亮。*

(これらの写真はどれも綺麗に撮れている。)

(69) 拿到台词以后，老师就一句一句地教我，一遍一遍地帮我纠正发音和声调，我也一遍又一遍地练习，直到能熟练流利地背下来。*

(台本が手に入ってから、先生は一字一句教えてくれて、何度も何度も発音や声調を直してくれた。私もすらすら暗唱できるまで何度も何度も練習を重ねた。)

(70) 大街上有轨电车的当当声，一夜又一夜地伴着他在床上辗转反侧。

(达理著《除夕夜》)

(彼は毎晩のように大通りを走る路面電車のカンカンの音に伴われ、輾転反側としている。)

(65)の二つの「一个个」はそれぞれ「逐一」の意味であり、状況語として後の動詞を修飾する。「个个」は主語として使い、「每个人」と言い換えられる。(68)の「张张」も主語として使われており、「每张(照片)」に言い換えられる。(66)の「一条条」は連体修飾語として「複数多数」を表す。(67)の「一口一口」、「一件一件」、(69)の「一句一句」は状況語として、「逐一反復」を表す。(69)の「一遍一遍」「一遍又一遍」も状況語として、後の動詞を修飾し、同じ動作・行為の繰り返しを強調する。そして(70)の「一夜又一夜」は繰り返しの意味のほかに、「延々と続く」というイメージが与えられる。

この論文のはじめにあげられた文章に、数量連語の「ABB」の重ねの表現は何回も出てきている。「一家家」は軒並みの「火锅(鍋料理)街」にある一軒一軒の店を思わせ、「一口口」は各テーブルに置かれたぐらぐら煮立っている「火锅」を浮かばせ、「一双双」はテーブルを囲んで食事をする人々が箸を鳥が空を舞うように使い、豪快にしゃぶしゃぶをする有様を浮かば

せ、「一张张」は一人一人の表情を目に浮かばせる。この生き生きとした描写は「火锅城」の様子を紙上に躍如としている。読者が見たのは文字ではなく、まるで絵巻のように思われる。この効果は、重ねの表現を使わなければなかなか得ることができない。

上記にまとめた名詞、動詞などのほかに、副詞などもあるが、今回扱わないことにする。

要するに、中国語の語句の重ねは二大目的がある。その一つは程度の強弱や回数の増減や持続時間の変化などを強調し、描写的存在である。つまり、重ねることによって量的変化がもたらされる。もう一つは独立した文の要素として構文上の役割を果たし、欠かせない存在である。つまり、重ねることによって質的变化がもたらされている。このような語句の重ねは、随時随所、書面に或いは日常会話に使われているから、基本的かつ生命力のある表現といえよう。

2003年の中国中央電視台（CCTV）の春節特別番組では、次の対聯の上聯の為に下聯を募集したところ、応募が殺到し、沢山の応募から次のような面白い下聯が選ばれた。

山山水水处处明明秀秀 (CCTV)
家家户户岁岁平平安安 (応募作品)

近年来、語句の重ねの表現は時代とともにどんどん活発になっている傾向もある。特に「AABB」方式の重ねは、二音節の形容詞や動詞や名詞などに広範囲で使われている。今後の課題として研究していきたいものである。

参考資料

1. 沈孟璽:《现代汉语理论与应用》南京师范大学出版社出版 1999.10
2. 李宇明:《论词语重叠的意义》《世界汉语教学》1996.1.
3. 华玉明:《重叠的句法作用》《湖南师范大学社会科学学报》1995.1.